

日常と社会から見た情報
- 「情報学」構築に向けた一試案 -

斎藤俊則 1) 大岩元 2)

1) 慶應義塾大学政策・メディア研究科

2) 慶應義塾大学環境情報学部

高校の普通教科『情報』の学問的基盤を構想する際の情報の捉え方について議論する。この新教科の学問的基盤については、とりわけ将来の教員育成などの長期的な展望からその必要性が指摘されており、実際に「情報学」という名の下にその内容が議論されている。本稿では、この情報学が日常と社会に根ざす“人にとっての情報”を対象として視野に入れるべきことを主張する。さらに“人にとっての情報”が持つ特性や、それを分析・考察する際の着眼点についてを議論する。また、そのような内容を含む情報学が、情報教育の中に情報を通じた個人と社会の結びつきを探求的に学ぶ契機をもたらすことを明らかにする。

キーワード：情報、普通教科「情報」、情報学、コンテキスト、主体性

Information described from daily and social point of
view

- A tentative plan toward the construction of
"Informatics" -

Toshinori SAITO 1) Hajime OHIWA 2)

1) Graduate School of Media and Governance, Keio University

2) Department of Environmental Information, Keio University

This paper discusses the viewpoint to describe Information as a part of the plan which is to build background knowledge for education of Informatics for non-vocational high-school students. Need of building background knowledge for education of this new subject has been indicated in the name of " Informatics " , especially as a preparation for long-term problems represented by teacher-training problem. This paper shows the concept of "Information for human" which should be contained in the curriculum of Informatics.

Keywords : Information , Informatics for non-vocational high-school students , Informatics , context , subjectivity

1. はじめに

高等学校における普通教科『情報』（以下、単に『情報』と表記する）の実施を前に、いかにしてそのための教員を育成し確保するかが問題となっている。目前に迫る実施に対応するためにいかに教員を確保するかという短期的な移行措置の問題のみならず、大学の教職課程で「『情報』の教員候補」をいかに育成してゆくか、そのためのカリキュラムをどう整備してゆくかという長期的な問題も残されている。このような状況を踏まえ、筆者の参加する「『情報』の教育を考える会」（代表・佐伯 胖青山学院大学教授）では昨年より、『情報』の学問的基盤（「情報学」という呼び名が与えられている[1]）を整備する必要性が指摘され、その中身についての議論がおこなわれている。

『情報』の学問的基盤とは、「『情報』とはなにを学ぶ教科なのかという根元的な問い」[2]を明らかにすると同時に、『情報』の教育内容の礎となる学問体系のことである。筆者は、このような意味での学問的基盤が必要であることに、賛同する立場に立つものである。ただし、このときに学問的基盤、すなわち情報学が、学問の対象となる「情報」をどのように捉えてゆくのか、という点についてはまだ議論の余地があると考えている。

このような関心のもとで、本稿では情報学が学問の対象としての情報を見いだす際の視点の置き方、すなわち「情報の捉え方」の問題を中心に議論をおこなう。そして、情報学の構想においてとりわけ問題となる“人にとっての情報”（後述）を捉えてゆくための視点のあり方の一例を、提示することを試みる。

2. 情報学構築の問題意識

まずはじめに、本稿で情報の捉え方を議論するにあたり、その背景にある問題意識を明らかにする。情報を扱う学問としては、すでに情報科学という分野が確立されている。普通教科『情報』の学問的基盤を考えると、この情報科学がそれにあたると見ることも可能である。しかしながら周知の通り、『情報』に含まれることになる教育内容は、情報科学の範疇に入るものだけではない。『情報』においては情報の科学的理解とともに、情報社会に主体的に対応し参画する能力・態度をいかに育むかが問われている。つまり『情報』にとって、その内容のある部分については情報科学に基盤があると見ることもできるが、それがすべてではないということである。

さらに、長期的展望に立って『情報』に代表される一般情報教育のあり方を考える場合、やはりそこには情報科学の観点を含むと同時に、現実の世界において情報とよばれるものをより幅広く扱う観点を含むことが望ましいと考えられる。なぜならば、社会における情報技術の普及は、コミュニケーションの領域の問題と、密接に関連する現象だからである。将来においては、コミュニケーションの情報技術に依存する度合いはますます高まってゆくであろう。そのような社会状況に対応してゆくためには、情報技術を支える考え方と、情報技術によって運ばれる情報、そして、それをを用いておこなわれるコミュニケーションのあり方を、個別的に学ぶだけでなく、それらに関連させながら学ぶことが不可欠になると予想される。

それでは情報科学の観点のみには収まることのない情報とは、いったい何であろうか。仮に（狭義の）情報科学の扱う情報を“計算機にとっての情報”と呼ぶならば、それは“人にとっての情報”と呼ばれることになる。ここで用いる「とっての」という言葉は、情報の読み手の想定を表す。情報科学において情報と呼ばれるものは、計算機によって読み取られ、処理の対象となるものである。この情報の読み手はあくまで計算機である。それに対して、“人にとっての情報”とは、現実世界の中で活動する人間自身が読み取る情報である。

“人にとっての情報”を扱う学問分野はすでに多く存在するが、『情報』の学問的基盤としての情報学においては、それぞれの知見を踏まえたうえで、情報という切り口からもう一度それらを整理してゆかなければならない。そこで、ここからは順次、情報学における“人にとっての情報”の捉え方

についての筆者のアイデアを提示してゆく。

3. “人にとっての情報”の特性

情報学において“人にとっての情報”（以下、特に断りのない限り単に情報と呼ぶ）をどのように捉えてゆくべきか。ここではその全体像の議論からおこなってゆく。

まずはじめに、情報とは常に人間の日常生活の中で発生するものである。コミュニケーションの場面にせよ、メディアの視聴の場面にせよ、現実人間と情報との関わりがもたれるあらゆる場面は、すべて日常生活の一端を構成するものである。そして後であらためて触れることになるが、日常生活が展開される生活環境のあり方は人が受け取る情報の内容に關与する。人は必ず特定の生活環境の中に位置しながら日常生活を送るが、生活環境に含まれる人間関係のあり方や、その中で形成される価値観は、情報の読み取り方や読み取られる内容に影響を与えることになる。これらのことから、情報を捉える視野の中には、その情報が発生することになる日常生活のあり方をも入れるべきである。

また、日常生活の基盤となる生活環境のあり方は、その時々社会全体のあり方と強い関連を持つ。人がどのような原理にしたがって人間関係を形成するか、なにを優先しながら生活習慣を構築するか、といったことは、その時々社会の政治・経済・文化のあり方と密接に関連する問題である。そして、社会の現実が生活環境のあり方に影響を与えるということは、その中でやりとりされる情報のあり方にも影響を与えているということである。したがって、情報を捉える視野の中には、情報が発生する日常生活のあり方に加え、日常生活が展開される場となる社会の現実も、捉えてゆく必要がある。

情報を日常生活や社会の現実との関連性を含めて視野に捉えるということは、言い換えれば、情報を単独で存在するものとしては扱わないということである。狭義の情報科学における情報がそうであるように、抽象的な次元においては、情報はあたかもそれ自体が何らかの実体を持ち、単独で存在するもののように捉えることができる。しかしながら、人間が扱う情報をできるだけリアルに捉えてゆくためには、そのあり方に大きな影響を与える日常生活や社会の現実といった事項を捨象すべきではないと筆者は考える。

それでは日常生活や社会との関連で情報を捉えるとき、そのような情報の持つ特性としてはどのようなことがあげられるであろうか。筆者は少なくとも以下のような三つの特性に注目すべきだと考える。

- 1) 情報は主体と共に存在する
- 2) 情報は共示義（コノテーション）として存在する
- 3) 情報は「つくられつつあるもの」である

1) は、情報が発生するためには、その情報を読み取る主体の存在が不可欠の条件であることを意味する。たとえば線の集合が文字として意味を持つことになるのは、それが誰かによって文字として読まれるからである。何かを情報として認める主体が不在ならば、そこにならばであろうと情報は発生しない。このことから、情報と、それを情報として認める主体とは、一体であり不可分であると考えられる。

このことは、自ずと情報についての分析や考察が、情報を認める主体に対する分析や考察へと向かうことを意味する。そして、そのような主体と情報の関係のしかた（なにを情報として認めるか、どのような経路を介して情報に接するか、どのように情報を意味づけるか、等）を捉えてゆくためには、日常生活や社会の現実に対して開かれた視野が不可欠である。

2) は、情報の読み取られ方の問題である。日常生活において情報は、与えられた表現が直接的に

意味するもの（表示義のレベル）のみならず、その表現が暗に示唆するもの（共示義のレベル）を伴って読み取られる。たとえば食品のコマーシャルに用いられる「カロリー50パーセントオフ」というキャッチフレーズからは、額面通りの意味だけではなく、「だから太る心配はありません。安心して（どんどん）お食べ下さい」という共示義的なメッセージが同時に読み取られる。そして、このような現象は広告のキャッチフレーズに限らず、日常生活における情報との接触においてはしばしば普通に見られることである。

表示義と比較した場合、共示義の読み取りにおいてはその場の状況、すなわちコンテキストの介入の度合いが高い。このことは、情報を形成する条件として、それが読み取られる際のコンテキストに注目する必要があることを意味する。そして、共示義の読み取りに作用するコンテキストとして重要になってくるのは、その情報の読み手の日常生活のあり方や、読み手がおかれている社会の現実のあり方である。たとえば先ほど例としてとりあげた広告のメッセージは、その社会において「カロリーが高い食品は不健康のもとである」、「不健康は悪である」といった価値観が支配的であるときに、大きな効力を発する。このことから情報も、日常生活や社会の現実といった具体的な場面や、それを受け取る主体と不可分のものであることが分かる。

3) は、情報を日常生活や社会の現実といったコンテキストの中で主体によって読み取られるものと考えるときに、その存在のしかたを表すものである。日常生活や社会の現実も、一刻として止まることなく変動するものである。そして、その中で生きる主体についても同様のことがいえる。したがって、これらの条件によって形作られる情報の存在のあり様は、静止し固定されたものとしてではなく、常に「つくられつつあるもの」として考えるべきである。

たとえば私たちは、複数のメディアを通して「同じ事件」の報道に触れることがある。このとき私たちが事件について知り得ること（事件についての情報）は、新たな報道に触れるたびに修正されてゆく。さらにそれだけではなく、私たちはその事件についてを他者と語ることもある。そのような場合、その事件についての他者の語りを聞き、さらに自分がその事件について何かを語るたびに、事件についての情報は微妙に、あるいは大幅に更新されてゆく。また、その事件とは全く無関係と思われる経験によって、その事件についての情報が変更されることもある。このような場合、何らかの手続きによって抽象することで、その人の持つ「事件についての情報」は、固定されたものと見なすこともできる。しかしながら、日常生活や社会というコンテキストを視野に入れる場合、むしろ情報は、一瞬たりとも静止することなく常に「つくられつつあるもの」として捉える方が自然である。

情報を、上述のような特性を持つものとして捉える場合、情報についての分析や考察はどのような点に注目しながらおこなうことになるか。少なくとも「情報とコンテキスト」あるいは「情報と主体としての人間」という二つの関係性に注目し、分析や考察を進めてゆくのが有効であると筆者は考える。以下ではこれらの二つの関係性についてを掘り下げながら議論を進めてゆく。

4．情報と社会的コンテキスト

先ほどは共示義の読み取りという観点から、情報とコンテキストとが不可分であることを説明した。ここでは情報とコンテキストとの関係性についての議論をさらに進めてみたい。

情報は必ずある特定の表現（たとえば文字や映像）から読み取られるものだと考える場合、コンテキストとは、そのような表現の外部にある手がかりであると考えられる。コンテキストは表現の外部から主体に作用し、表現の読み取りを方向付ける。この結果、主体は表現を特定の意味の脈絡の中に配置し、その脈絡に沿うようにその意味を読み取る。

このコンテキストという概念をより具体的な次元から見た場合、現実において情報の読み取りに強く関与するのは、主体がおかれる社会の現実や、その現実に規定されて形作られる生活環境から発生するコンテキストである。筆者はこのような社会の現実に根ざすコンテキストのことを、特に「社会

的コンテキスト」と呼んでいる。

情報の読み取りに關与する社会的コンテキストとしては、たとえば次のようなものが考えられる。まずは社会において広く浸透する価値観である。たとえば「家族の団らん」という言葉から父と母と子の揃う姿が連想される場合、そこには「親子2世代による核家族が“普通”である」、あるいは「親とは父と母とが揃っていることが“普通”である」という価値観がコンテキストとして作用しているといえる。なにを“普通”であると見なすかは最終的には個人の価値観の問題に属することであるが、社会を形成する主体の間では、ある特定の価値観が“自然なもの”として広く共有されることがある。そしてその背景には、政治・経済・文化・歴史といった様々な条件によって規定される社会の現実が存在する。このような価値観の存在はしばしば、人のおこなう情報の読み取りに、コンテキストとして作用する。また、マスメディアをはじめとする情報の送り手の側も、しばしば特定の価値観がコンテキストとして作用することを見込んだ上で表現を構成する。

また、同じように作用する社会的コンテキストとして、集団的に共有される物語の存在があげられる。日本において広く浸透する物語としては、やや古いものであるが、たとえば「勸善懲惡」の物語や「立身出世」の物語などがあげられる。このような物語は、特定の価値観と結びつきながら、主体による情報の読み取りの枠組みを形成する。主体はそのような物語に依拠することで、特に説明がなくとも、表現をある特定の意味の脈絡の中で捉えることになる。これは小説やドラマなど、フィクションに属する情報のみに当てはまるものではない。現実における情報、たとえば他者の振る舞いに対する解釈や、自己の振る舞い方の規定のしかたなどにも、物語の枠組みが適用されることがある。そして、ある社会においてどのような物語の枠組みが浸透するかは、先ほどの価値観同様、社会的な条件によって強く規定される。

このように、情報は社会的コンテキストの作用を前提としながら主体によって読み解かれる。このことは、情報と主体が切り離せないこと、そして主体とは常に特定の社会に位置しながら日常生活を送る存在であることから必然的である。

しかし一方で、情報と社会的コンテキストの間にある関係には、全く逆の側面もある。情報は社会的コンテキストの中で発生するだけでなく、そのような情報自体が社会的コンテキストを発生させる条件でもあるのだ。とりわけマスメディアやパーソナルメディアが浸透する社会状況においては、そのような傾向は顕著である。メディアを介して不特定多数の人間送られる情報は、ある特定の話題が共有される状況を生み出す。このような状況においては、その話題を成立させる価値観や物語も広く共有されやすい。それに加えて社会において一旦共有された話題は、広く共有されるが故に、情報の送り手によって反復の対象となりやすい。このことがさらに、特定の社会的コンテキストの形成に結びつくことになる。

ここまでに見てきたとおり、特定の社会に位置する主体の存在を前提とすることで、情報とコンテキスト（社会的コンテキスト）の間には、互いにつくりつくりされる関係が成立しているといえることができる。そして、さらにマスメディアやパーソナルメディアの浸透という条件を加えることで、現代においてその傾向は一層顕著なものであると考えられる。

5 . 情報と主体

「情報とコンテキスト」の關係に続いて、ここでは「情報と主体としての人間」の關係についてを議論する。情報にとって、それを読み取る主体の存在が不可欠であることは、すでに述べてきた。ここでは、情報を読み取る主体のあり方を掘り下げるところから議論を始めたい。

一般的な意味での主体という言葉には、「自己の意志に基づいて行為する存在」という意味が含まれている。この観点からすれば、情報を読み取る主体の行動は、主体となる人の意志に基づくことになる。また、ある表現からどのような情報が読み取られるかという点に主体は関わっているが、その

ときの情報の読み取り方も、先ほどの観点からすれば主体の意志によって決められることになる。

一見すると上記の議論からは、情報の形成にとって本質的な条件は、読み手となる主体の意志であるという見方を導くことになる。すなわち、ある表現を目の前にした読み手は、自分の意志に従いながら自由に表現を意味づけてゆき、情報は主体によるそのような自由な意味づけの結果として生まれて来るという見方である。

しかしながら、先ほどコンテキストについての議論の中で言及した「社会的コンテキスト」の作用を想定するとき、上記の見方は必ずしも適切とはいえないものとなる。なぜならば、社会的コンテキストとは、主体の持つ価値観やそれに基づいて発生する意志を、主体の外部から強く規定するものだからである。そのような社会的コンテキストの作用を認めるということは、主体の価値観や意志といったものを、外部の影響力のもとで形作られるものとして捉える見方に結びつく。そして主体の拠り所である意志や価値観が外部の影響力によって強く規定されるものであると見なすことは、主体の存在自体を、外部の影響力から独立した単独の存在としてではなく、外部の影響力の中に埋め込まれ、その中で相対的に自立した存在として見なす視点に結びつく。

情報を読み取る主体のこのようなあり方は、具体的な次元においては、主に社会における立場・役割についての主体による自己認識の中に現れる。たとえば学校の教室という場は、おおよそ「教師」という自己認識を持つ者と、「生徒」という自己認識を持つ者という2種類の主体によって構成されると考えられる。この異なる自己認識を持つそれぞれの主体にとっては、終業を知らせる「チャイム」は、おそらく異なる意味を持つ情報として受け取られるであろう。このとき「チャイム」という同一の表現から読み取られる情報は、主体のあり方を規定する立場・役割の自己認識によって差異もたらされるということになる。

ここで重要なのは、「教師」や「生徒」といった主体としての自己認識がなにによってつくられるかである。このような自己認識の発生には、まずは学校制度という社会的な条件の存在が不可欠である。このような制度が存在することによってはじめて、教室の場を取り巻くコンテキストが形成され、その中で「教師」や「生徒」といった、情報の読み取りに差異をもたらす主体の自己認識が生まれてくることになる。さらにはここに、「教師」や「生徒」といった立場に期待される、理想的な行動規範の原型が、社会的に共有される価値観として主体の振る舞いに影響を与えることになる。このように、情報の読み取りに差異をもたらす主体のあり方は、外部の影響力、すなわち広い意味での社会的コンテキストを条件としてつくられてゆくものである。

さらに主体の形成には、主体自身によって読み取られた情報の関与も認められる。たとえば先ほどの学校の例ならば、「生徒」としての自己認識は、終業を知らせる「チャイム」を聞いたときに、新たに自己の中に作りだされて行く。あるいはメディアによって送り出される男女の恋愛に関する紋切り型の情報は、それを繰り返し受け取る視聴者の意識に、男性や女性のあり方についての特定の固定された行動規範を植え付ける。このように、主体は自分が読み取った情報によって自己の主体としてのあり方を確認し、そのことによって主体としてのあり方をその都度作り上げてゆく。

ここまでの議論から、情報と主体との関係については次のようなことがいえる。まず第一に、主体によって読み取られる情報は、主体のあり方（意志や価値観など）によって差異もたらされる。このときの主体のあり方は、外部の影響力（社会的コンテキストなど）を条件として作り出されるものである。そして第二に、主体によって読み取られる情報は、それ自身が主体のあり方を規定する条件としても作用する。

ただし、これまで見てきたとおり主体のあり方が様々な条件によって絶えずつくられて行くものであるということは、主体自身が自己の意志に基づいて主体性を形作る過程に参加する可能性も残されている。話は少々横道にそれるが、現在、メディア・リテラシーと呼ばれる学習実践が徐々に普及しつつある。その実践の根底にある考え方は、主体性の形成過程におけるマスメディアの圧倒的な影響

そうということである。そのためにメディア分析などの手法を用いて、マスメディアからの情報を批判的に捉え、主体的に読解するための能力を育む実践がおこなわれている[3][4]。

6. 情報学によって開かれる可能性

これまでに議論してきたような捉え方において見いだされる情報を、今後の情報学の構想の中を含むことで、どのようなことが期待されるか。とりわけそのような情報学が今後の情報教育の基盤となることによって、以下の二つのことが期待される。

- ・情報教育の中に、「価値観」に対する問いかけの契機を含むことになる
- ・同じく情報教育の中に、情報を自分が生きる社会や日常生活との関係から捉える視点を導入することになる

これまでの議論において、情報が主体の意志や価値観と密接な関係を持つこと、そしてそのような主体のあり方は常に生活環境や社会の現実を前提につくられることを主張してきた。このような情報に対する捉え方を情報学の中に導入することで、これからの情報教育の中に上記の二つの事柄が反映されることが期待される。これらの事柄は、情報化がさらに進展する今後の社会に生きる子供たちに、是非とも学んで欲しいことである。

さらに、情報やそれを読み取る主体のありかたを常に「つくられつつあるもの」として捉えることは、情報についての学が、探求的な態度を基本としなければならないことを意味する。このことが情報教育に反映されることで、従来の教育に見られた「正解を出したら終わり」という傾向を、「常に問い直すこと」に重きを置くものへと転換してゆく契機となることが期待される。

7. おわりに

“人にとっての情報”の捉え方を中心に、情報学の構想の中に含まれるべき内容を、筆者なりの観点から議論してきた。本稿が、タイトルにある「一試案」と呼ぶべき内容を網羅しているかどうかについては、心許ない点もある。しかしながら、今後にわたって情報学を構築し、ひいてはそれをもとにした情報教育を考えるにあたり、従来個別的な学問の中に分散していた“人にとっての情報”への取り組みを、ある視点のもとで統合してゆく必要性があることについては、ある程度の賛同を得られるのではないかと考えている。本稿がその際の議論のたたき台の一つとなることを願っている。

8. 参考文献

- [1] 武井恵雄：情報社会論の試み，情報処理教育研究集会（2000年12月8，9日京都大学）論文集，2000年
- [2] 同上
- [3] カナダ・オンタリオ州教育省編，FTC（市民のテレビの会）訳：ディア・リテラシー --- マスメディアを読み解く，リベルタ出版，1992年
- [4] 鈴木みどり：メディア・リテラシーとは何か，世界思想社，1997年